

E・A・ゴールドン夫人の生涯

中村悦子

（ゴールドン文庫
和漢書 一、四四三冊）

「ゴールドン文庫」の創設者である夫人に私が最初に関心を持ったのは、明治・大正期の女子教育に大きな足跡を残した実践女子学園の創立者、下田歌子を調べている時であった。

華族女学校の学監であった歌子が、一八九三（明治二十六年）年皇女教育視察のために渡欧した際、ロンドンで懇切に世話をしてくれた親的な女性があった。ハイドパークの傍の「みやのした」と日本名をつけた自邸に歌子を寄宿させ、当時としては非常に困難だったヴィクトリア女王の謁見まで実現させた女性、それがゴールドン夫人だったのである。その後調べを進めるに従って、夫人

の日本文化への貢献の大きさと、英国貴族の身で、日本を愛しついに日本に骨を埋めたその生涯に私は深い興味を抱くようになった。夫人が私の二つの母校のそれぞれの創立者と厚い友情で結ばれていた事にも縁（えにし）を感じないではいられなかった。まだ不明の点も多いが、ここに夫人の一生の概略を記してみよう。

エリザベス・アンナ・ゴールドンは、一八五一年イングランドのランカシャー地方の名家ヘンリー家に生まれ、後にスコットランドの貴族ジョン・エドワード・ゴールドンの妻となった。ゴールドン家は「太平天国の乱」を鎮圧した司令官として勇名を馳せたC・G・ゴールドン将軍の一族で、古くから名門として知られていた。一八九七年の英国紳士録によれば、ジョンはエジンバラ大学出身で、ネス湖に近いエルギンとネアン地方を選挙区とする保守党の議員であり、ロンドン商工会議所会員としても活躍していた。

一方、夫人は数人の子女を育てながら、ヴィクトリア女王の女官をつとめ、さらにオックスフォード大学を一

八八六年に三十五才で卒業している。この時大学で比較宗教学、サンスクリットの大家F・M・ミュラー博士に師事したこと、同門の日本人留学生高楠順次郎らと知り合ったことが彼女のその後の生き方を決定したといえるよう。

大学でアジア宗教に魅せられた夫人は、夫との世界旅行の途次、一八九一（明治二十四）年にはじめて日本を訪れた。

この時の旅行記“Clear Round”には「日の出の国」「天使の子の国」として、日本の美しい自然と、穏やかな微笑を浮べ上品で清潔で屈託ない国民と、その高い文化が描かれている。版を重ねて広く読まれたこの本は、英国人の日本への好感を生み、日英同盟の締結に有利に作用したと評価された。

旅から帰った夫妻は、その年発足したジャパン・ソサエティに入会し、一層日本とのつながりを強めた。ロンドンで下田歌子と出会ったのはこの頃であった。夫人の「姉妹母子もただならぬ懇情」に、二人の間には国境を

越えた友情が芽ばえた。その後夫人は他の英国在留日本人にもさまざまな援助を惜しまず、「英国における日本の母」と慕われたという。

そして十数年が過ぎ、夫人は日本と新たな結びつきを持つこととなった。日本に洋書が少いと同門の高楠らが嘆くのを聞いた夫人が、それを英・米・カナダの新聞に訴えたのが発端だった。それは日露戦争後の日本への関心の高まりを背景に大きな反響をよび、夫人のもとに九万冊余の書籍が届けられた。一九〇七（明治四十）年八月の末、夫人は再び来日してこれらの本を日比谷図書館に寄託した。こうして「日英文庫」(Dulce Cor Library)とよばれる歴大な書籍が日本にもたらされた。これが日本の文化にどれ程の貢献をしたかはかりしれない。しかもこの洋書寄付運動を、夫人はその死まで十七年の長きにわたって続けたのだった。

この再来日を機に夫人は日本に留まって、かねてからの持論である仏耶一元の研究にとりかかった。それは仏教とキリスト教の同根をあらゆる方向から実証しようと

するものであった。夫人は中国の景教を媒介として、キリスト教が空海の真言密教に伝えられたに違いないと考えた。八世紀の頃、唐の長安に建てられた「大秦景教流行中国碑」の複製を高野山に建立し、漢字とシリア文字で書かれた碑文の研究を進めたのもそのためであった。

夫人はこのほか、ザヴィエル記念碑の建立やエジプト発掘などにも援助の手をのべた。また名誉講師として早大の教壇に立ち、『愛国婦人』などの新聞や雑誌に寄稿し、講演も行なった。「Speaking Stone」「The Glories of Christ」「Symbol of the Way」「In the Name of the Messiah」「The Lotus Gospel」などなど、多くの著作を丸善や早大図書館から出版し、『弘法大師』などの仏教書の英訳も手がけた。

だがこうした充実の日日に突然、第一次世界大戦に従軍していた長男戦死の悲報がもたらされた。急いで帰国しなければならなくなった夫人は、それまで研究のため収集した洋書約一五〇〇冊、仏画や器物など五〇〇〇余点を早稲田大学に寄贈することとした。大隈夫妻を敬慕し

ていた夫人が、「学問の独立を標榜する大学で自由に同好の士の研究に資する」ことを望んだためだった。

こうして一九一六（大正五）年の末に「早大ゴルドン文庫」が誕生した。それは夫人の深い探求心によって集められた宗教、民族学などを中心とする貴重なコレクションであった。その中の一つに、現在も図書館の玄関脇に据えられている一对の石羊がある。夫人が朝鮮の義州で入手したというこの石羊のイチハツ紋の台座の柱には、現在はよくわからないが、輝く真珠とそれを破壊しようとからみつくとカゲ、そしてラテン様式の七つの十字架が彫られていたらしい。夫人は著書の中でこれらの文様と、中国景教碑の文様、二世紀のシリアの神学者バル・ダイサンの詩「真珠賛歌」、紀元前六世紀の頃のメロエ神殿彫刻とを関連づけ、更に石羊の角はユダヤ教会で贖罪の日に吹くショファア（角笛）と同一であると論証している。つまり夫人はこの石羊を古代宗教の東アジア伝播のあかしと見たのであった。大隈侯も「これは消すことのできない石に刻まれた証拠である」と語ったという。

さて大隈侯らに惜しまれて去った夫人がそれからの数年をどのように暮したか、はっきりしない。だが一九二〇（大正九）年頃には再度来日して、京都ホテルで研究三昧の日を送っていたことがわかっている。

この時期、夫人は既に夫と愛息を失っており、高齢となつて宿痾にも冒されていたらしい。「淋しき異邦人」と自らを呼ぶ夫人にはかつての闊達さは望むべくもなく、京都ホテルでの晩年の六年間、ただ一度しか外出しなかつたといわれている。だが研究心は衰えることがなかつた。学問上の疑問については誰彼となく手紙でただしなから、「Heirlooms of Early Christianity Visible in Japan」「Indian Church History」「Asian Christology and the Mahāyāna」等の著作を次々と上梓した。その一方で、ユダヤ問題や排日運動にも心を痛めて発言を続けた。学問とヒューマニズムに生きた晩年であった。

一九二五（大正十四）年六月二十七日、かねてからの腎臓病が悪化して京都ホテルで逝去、七十六歳であった。葬儀は京都東寺において仏式で営まれ、遺言によつて高

野山奥の院と朝鮮金剛山長安寺に分骨して葬られた。戒名は「密蔵院自覚妙理大姉」。仏耶一元の研究に生涯をかけた人にふさわしく、高野山景教碑の傍らの、八葉蓮華に十字架を配した墓の下に眠っている。

先般高野山大学を尋ねた私は、夫人の死後収められた蔵書（高野山ゴールドン文庫）に混つて部厚い遺稿が残されているのを知つた。ホテルの一室で病と戦いながら書き続けたものだろうか。びっしりと書きこみの残る草稿を見ながら、家族も国も捨てて研究に没頭した夫人の心を思つて、私はいつか深い感動に包まれていった。



ゴールドン文庫蔵書票